

Title	庭 : もうひとつのインテリア
Author(s)	加藤, 淳子
Citation	デザイン理論. 37 P.88-P.89
Issue Date	1998-11-07
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/52748">http://hdl.handle.net/11094/52748</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

# 庭——もうひとつのインテリア

加藤淳子／成安造形短期大学

中国の西、ウィグル地区の農家はいずれも高く積み上げた日干し煉瓦に囲われて、日常のさまざまな作業、食事、団欒などの生活は、その囲われた庭にある。そこに、現代のわれわれが忘れかけているが、生き生きした生活を感じるのは何故なのだろうか。

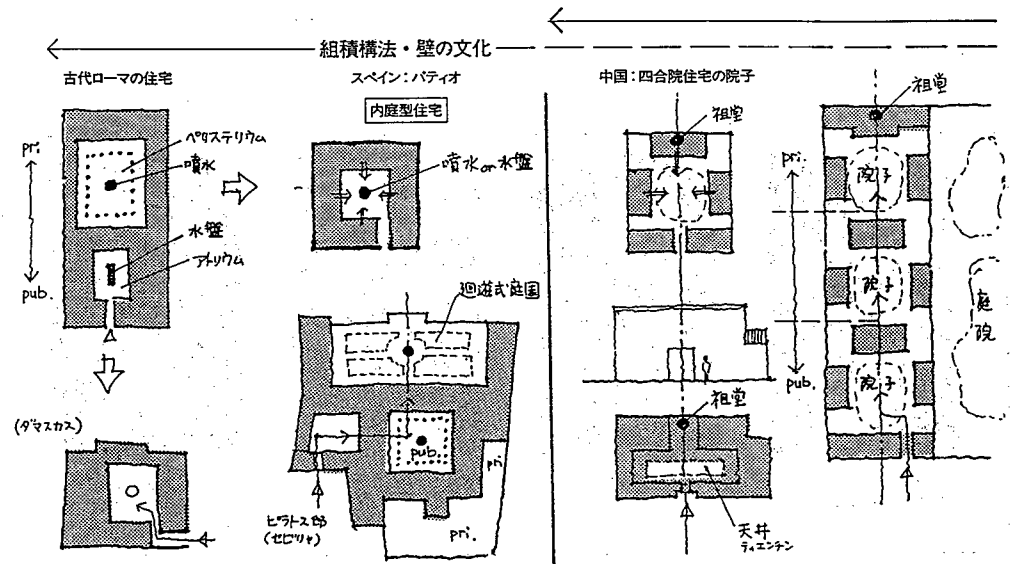
同じ中国の伝統的住居、四合院でも、生活の匂い溢れる中庭・院子が今も機能しているし、特に地中海沿岸には、いわゆるコートハウスの原型ともなっているパティオを持つ住居が広範囲にみられる。その他世界の各地に、そうした人々の暮らしの中心となるような中庭の例を見ることができる。

これら中庭を持つ住居は、わが国一般にみられるように建物を中心にまわりを庭が取り囲むという外庭型に対して、庭を中心にして建物を取り囲むという内庭型住居である。このように、住居を庭と建物との関係によ

て住居形式を二分してみると、庭と生活との関わり方が異なってくる。外庭型住居の庭は、生活の場として使われることはあっても、あくまでも外として意識されるが、内庭型住居の庭は、屋根はないけれども家の内、すなわちほとんどインテリアとして扱われる。そこは、食事や作業の場として、通路や部屋と部屋の緩衝地帯として、日々の生活と密接に関わった空間であるという意味でまさにインテリアであるといえる。

しかし、それらどの地域の中庭も同じ関わり方でインテリアであるのではない。

基本的に中庭は、ある一定以上の建物の拡大の中で生まれてきたものであるとすれば、その拡大の際にはたらく構成原理は、その地域の建築材料と構造様式と深く関わっている。すなわち、「屋根の文化」を生み出した軸組構法は木材を使って一棟の大きさに制限



があり、中庭のかたちは棟の連なり方によって異なるが、石または煉瓦を積み上げる組積構法は「壁の文化」に属して、無制限に建築拡大が可能で、中庭は建物の中に嵌め込まれたかたちをとる。そして気候風土、文化、歴史的背景などが絡み合っ、それぞれの地域独自の中庭をかたちづくっている。

例えば、地中海沿岸の、壁の文化圏にある中庭型住居では、連続する壁によって完全にとり囲まれて、外部に対してほとんどデザイン的関心を払わない代わりに、すべてのエネルギーを内側のパティオに注いで、花が咲き乱れ、水の溢れる天国の再現を試み、そこでの生活を楽しむ。それは過酷な砂漠という外の自然に対する単なるサンクチュアリー以上のものである。

一方、中国の中庭型住居、四合院は屋根の文化に属して、幾つかの機能を異にする棟が庭を媒介として結び付けられたかたちをとる。中庭・院子は通路であり、かつ各棟が抱えきれない生活の機能を補って、要の空間となっている。

地域を少しずらして、韓国の上層階級の両

班住宅では、中庭・アンマダンが男女、主従などの儒教的ヒエラルキーに従ってそれぞれの棟を隔て、その何もないヴォイド性によって印象づけられる。規模の拡大化につれて棟と棟の間に幾つかの中庭を生み出すが、中国の四合院に見られるような規則性はない。

そして外庭型住居の文化に属しているわが国の場合、中庭の例は少ないが京都などの町家では、間口の狭く奥深い敷地条件の中で棟を奥へと重ねる際にできる通風と採光のための隙間的空間・坪庭がある。そこは、石や植物を配して下り立つことは少ないが、面する部屋のしつらえ的装置とみることができる。

現代のわが国では生活の何もかもを室内に取り込んで、庭というと木を植え、花を育てる程度の意味しか認めなくなっている状況がある。特に、狭小な敷地条件にあって建蔽率や容積率などの制約の中では、ここにみえたように庭というもうひとつのインテリアを発想することで生活空間の拡大化と豊かさを計ることができるのではないかと考える。

以上の内容についてスライド等で具体例を提示しながら発表を行った。

